日本國天皇家論
章　上宮聖王

日本國天皇実伝

隋書・倭國は「日本國」

私たちは古代奈良・大阪に実在した日本國とその天皇、上宮聖王の実在を確かめることができた。ここで、同時代の史料、「隋書」を検討してみよう。

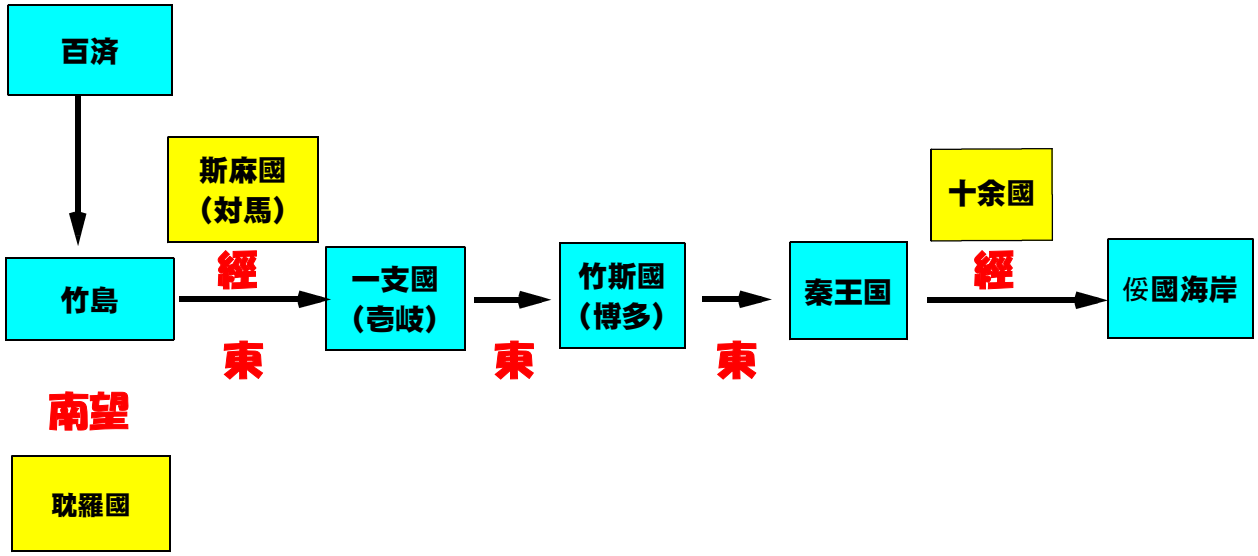
隋書「倭国」の位置

明年、上遣文林郎裴清使於倭国。度百濟、行至竹島、南望耽羅國、經都斯麻國、迴在大海中。又東至一支國、又至竹斯國、又東至秦王國。其人同於華夏、以為夷洲、疑不能明也。又經十餘國、達於海岸。自竹斯國以東、皆附庸於倭。

明年（大業4年、推古16年・608）、上（煬帝）は文林郎裴清を遣わして倭国に使させた。百済を渡り、竹島（絶影島か）にゆき、南に耽羅國（済州島）を望み、都斯麻國（対馬）をへて、はるかに大海の中にある。また東にいって一支國（壱岐）に到り、また竹斯國（筑紫）に到り、また東にいって秦王國（厳島・周防、秦氏の居住地か）に到る。その住民は華夏（中国）に同じく、夷州（今の台湾）とするが、疑わしく明らかにすることはできない。また十余國をへて海岸に達する。竹斯國から以東は、みな倭に附庸する。

（「魏志倭人伝」岩波文庫）

隋書「倭國」の行路



「隋書」の「倭國伝」の行路は上のようになる。大業四年(608)、隋の使者がやって来た。その使者の名前は隋書「倭國伝」が記すように「文林郎裴清」である。彼がやって来た国は「倭国」と「隋書」は記している。さて、この国はどこにあったのか。通常は近畿天皇家の国家とされる。その認識に対して古田武彦氏は「九州王朝」と主張している。果たして「倭國」はどこか。「隋書」には「文林郎裴清」が来た行路が簡単に書かれている。「文林郎」とは隋「煬帝」が秘書省に置いた従八品の官位と云われる。隋書に書かれた行路は大業四年(推古十六年・608)の「文林郎裴清」の現地認識である。彼の認識に従って隋書「倭國」の位置を追ってみよう。行路図は比較的単純である。

(1) 度百濟、行至竹島、南望耽羅國、經都斯麻國、迴在大海中。

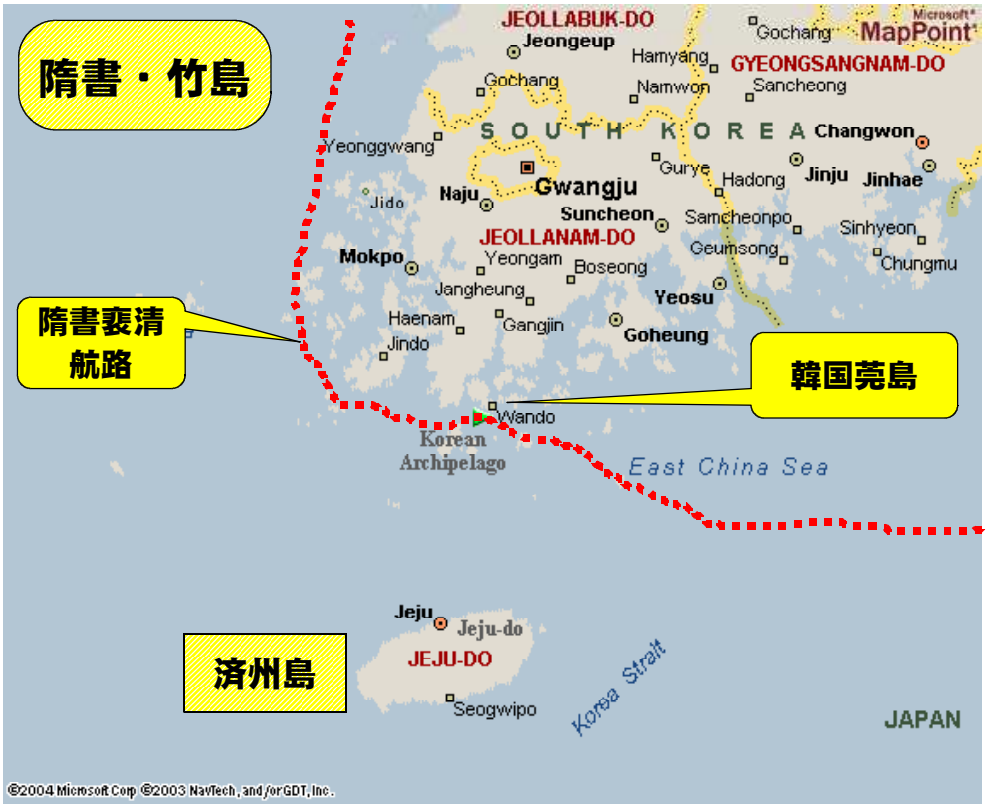
隋使・文林郎裴清は海路をとっている。「度百濟」は「百済を渡り」と訓まれている。しかし「百済に渡り」と読むべきであろう。中国本土から黄海を百済に渡った。その後、朝鮮半島を南下した。そして「行至竹島」である。この竹島とはどの島なのか。むろん現在、日韓政府がその領土権を争っている島根県隠岐の島町に属し隠岐諸島の北西約157キロメートルの日本海上に位置する竹島ではない。「魏志倭人伝(岩波文庫)」は「竹島」を「絶影島か」と頭注を入れている。

絶影島とは韓国釜山の影島である。
影島はかつては絶影島と称され、植民地時代には牧島(牧の島)とも呼ばれた。「絶影島」の名は駿馬を意味するとも、空島政策のため人影がなかったためとも説明される。　(wikipedia.org/wiki)

しかし、隋書は竹島の位置を「度百濟、行至竹島、南望耽羅國」と書いている。「南望耽羅國」は南に耽羅國を望むという意である。竹島から耽羅國が見えた。耽羅國とは現在の済州島である。竹島は釜山にあったのではない。済州島の北に位置する島である。竹島とは朝鮮半島南部に存在する韓国莞島であろう。

シルクロード行　韓国莞島(ワンド)(読売2009・10・21)

・・・張保皐(チャンポゴ)は828年、莞島に軍事要塞「清海鎮」を設けた。そして新羅商人たちを束ねると、交易に乗り出し、中国東南部から日本に至る海域を支配するようになる。・・・・張の司令部跡を李さんと歩いた。朱柱と瓦屋根の城門が再現されている。見張り台だった丘を登りきると、視野の先に水平線が広がった。「北は日本へ、南は中国への航路でした。一望できるでしょう」。左右に大きく首を振って李さんが言った。・・・・・・



地図で「韓国莞島」の位置を見てみよう。 新羅統一後、張保皐（チャンポゴ） が軍事要塞を築いたのは、元々この島が、交通の要所だったからである。中国・日本への海路のいわば「ハブ港」の位置にある。「竹島」とはこの「韓国莞島」が最もふさわしい。

対馬については「經都斯麻國。迴在大海中。」と書いている。「経」とは「ある場所を過ぎて進む」という意味である。随使は対馬に寄港していない。通り過ぎたという意味で「経」を使っている。そしてその位置を「迴在大海中」と書き、対馬を見ながら通り過ぎている。随使の航路は魏志倭人伝の航路とは異なる。

(2) 又東至一支國、又至竹斯國、又東至秦王國。

「又東至一支國」の意味は「また、東に行くと、壱岐國に至る」である。ここでは壱岐への方向を東と書いている。この記述について南のまちがいだとする見解が多い。

“これは方向が、間違っている。” “方向に関する中国側の認識は正しいとは言えない。”

隋書に対する不信の基になっている方向表示である。

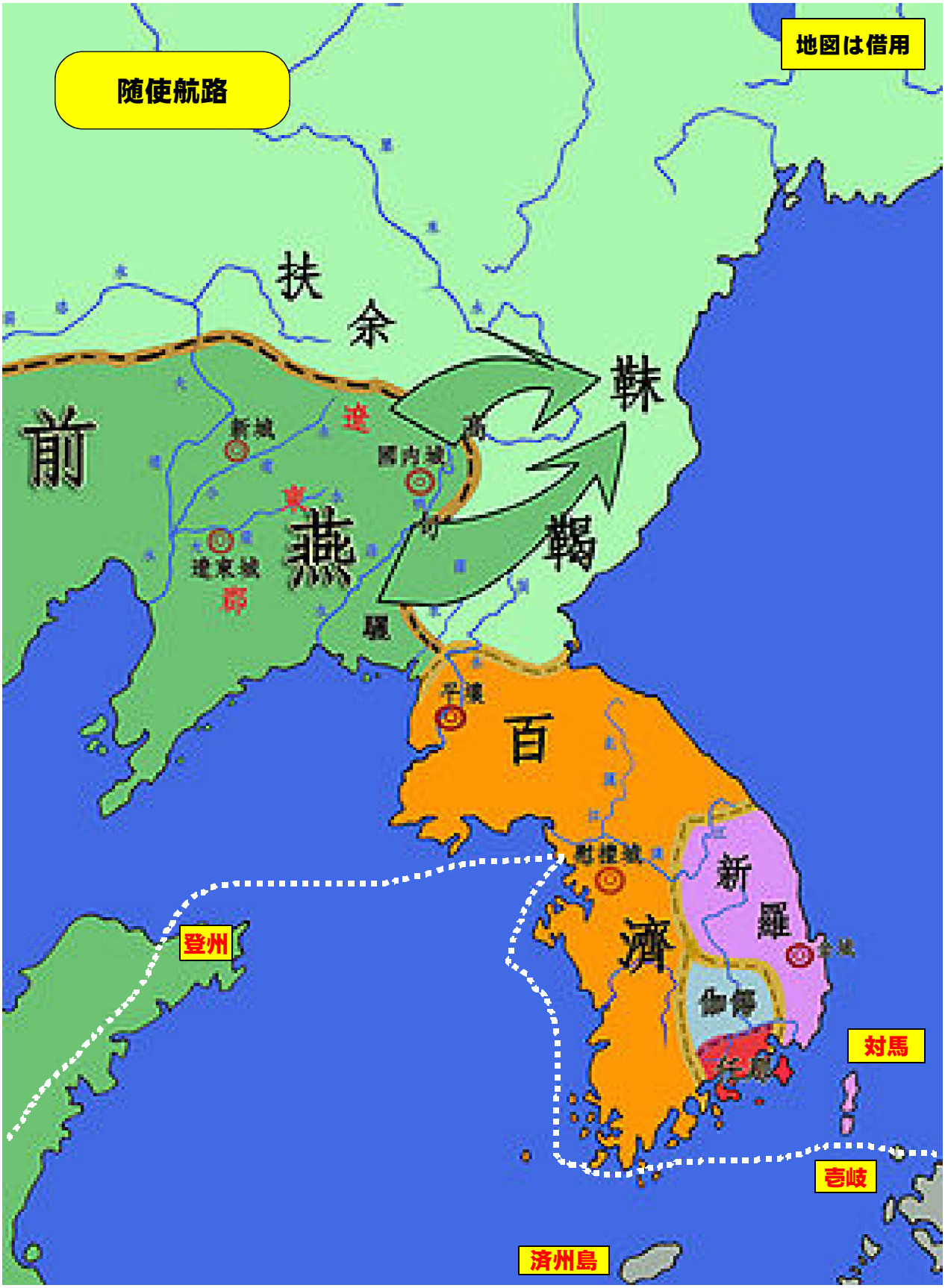
対馬－壱岐を東と書くようでは中国側の方向認識は大きくまちがっている。対馬から壱岐へは南である。そうであれば魏志倭人伝における方向も間違っているのではないか。魏志倭人伝に於ける南は東であろう。東となれば「邪馬台国」は東つまり奈良となろう。

このように邪馬台国・奈良説の根拠となっている。しかしこの見解は隋書・倭国行路を誤読していることに原因がある。魏志倭人伝・邪馬壱国行路は対馬・・・・・壱岐・・・・・唐津である。対馬から壱岐へは誰が見ても「南」である。故に魏志倭人伝は「又南渡一海千余里名曰瀚海至一大國」と書いた。問題はない。対馬から壱岐へ

の方向は南である。

ところが隋書の「又東至一支國」は対馬から壱岐へ向ったのではない。隋書の行路は百済－竹島（韓国莞島）－壱岐である。仮に「竹島」が莞島ではないとしても、随使は済州島を南に見て壱岐にやって来た。済州島から壱岐への方角は東である。隋書に示された方角の東はまちがっていない。

随使は「竹島」に到着し、済州島を南に見てそのまま壱岐に向かった。竹島からの航路では対馬へ寄港する理由はない。故に「経る（通過）」と書いたのである。



隋使・文林郎裴清の倭国行路は「百済」・・・・・「竹島」・・・・・「一支國」・・・・・「竹斯國」・・・・・「秦王國」である。文林郎・裴清使節団の方向認識は全く正しい。

(3) 又竹斯國、又東至秦王國

壱岐から「竹斯國」に到着した「竹斯國」は「筑紫國」で問題ない。博多である。文林郎裴清は博多には寄港したであろう。そして再び乗船して海路を進んだ。そして「秦王國」へ到着した。「筑紫國(博多)」からさらに「東」へ航海すると「秦王國」に至った。これは瀬戸内海航路である。

「隋書倭國伝」には阿蘇山が紹介され、隋書「倭國」は九州(熊本)とする見解もある。しかし「倭國」が熊本周辺だとするなら博多で上陸しその後の陸路となる。だが隋書の行程記事には九州陸行記事は無い。隋書・倭國は九州に存在した國ではない。

「阿蘇山有り」は隋書「倭國」が九州にあったということではなく、隋書「倭國」は九州をその統治下に置いていたというという政治状況を示しているのである。

(4) 秦王國

「竹斯國」から、又東に行って到着する「秦王國」とはどこか。江戸時代の「朝鮮通信使」の航路を参考にしてみよう。

対馬府中－壱岐勝本浦－筑前藍島－長門赤間関－周防上関－安芸蒲刈－備後鞆浦－備前牛窓－播磨室津－摂津兵庫－摂津大阪－山城淀－山城京都－近江守山－近江彦根・・・・・

これが「朝鮮通信使」の行路である。この行路では「秦王國」は「周防上関」に当たるであろう。理由はこの國の様子を「同於華夏」と書いているからである。「中国と同じ国」という見られた國は、姫氏建国の倭國であろう。「倭國」とは中国呉出身の姫氏が打ち立てた國である。大業4年(608)にはまだこの國は、古式の中国生活様式を残していたのであろう。

(5) 又經十餘國、達於海岸。

随使は瀬戸内海を東行して行った。その間、約十国を経過している。江戸時代の朝鮮通信使も瀬戸内海の国々を通過している。

安芸蒲刈－備後鞆浦－備前牛窓－播磨室津－摂津兵庫－摂津大阪

随使が到着した「海岸」と大阪湾である。ここで行程は終わる。ゆえに、難波が「倭國」である。難波は難波宮が存在した日本國の都、難波である。隋書「倭国」とは日本國である。

なぜ、国名が「隋書」では「倭國(タイコク)」なのか。聖徳太子自筆と云われる「法華経義疏」には最初の頁に「大委国上宮王私集非海彼本」と云う張紙があるという。古代関西に存在した国家、「日本國」の上宮聖王は自國を「大委国」と書いた。「日本國」の國名は「大委國」であった。「大委」は「タイ」と云う音に近い。

「倭國」のまとめ

(1) 隋書・倭國は魏志倭人伝・倭國と異なる国家である。
(2) 魏志倭人伝・倭國は、八女に都を置き、矢部川沿いに存在した二十一の連邦であった。
(3) 隋書「倭國」への行路は瀬戸内海を東行して海岸に到着している。従ってそこは大阪である。
(4) 「竹斯國から以東は、みな倭に附庸する。」と記すように、「倭國」は「竹斯國」から東の諸国を支配していた。当然、「倭國」は「竹斯國(博多)」の東に存在したと読まなければならない。
(5) 「隋書・倭國」は、関西に存在した古代国家「日本國」である。

竹島
一支
秦王國
竹斯國
耽羅國
日本國
隋書行路
大韓民国
Republic of Korea
ソウル
Soul(Seoul)
(C)Yahoo Japan,(C)RMC,HK,GeoC
100km